

創刊号

1981年12月

社會經濟史學會中國四國部會
會報

(発行)

会報編集委員会

広島大学経済学部内
広島市中区東千田町1-1

創刊の辞

中国四国部会代表理事

(広島女子大学長) 今堀 誠二

社会経済史学会中国四国支部が、会報を発行することになったことは、御同慶にたえない次第である。

この学会の四国部会は、戦前からすぐれた研究活動を続け、例えば昭和18年7月に、松山高専商業学校（現在は松山商大）を会場として全国学会を開いた時、西園寺源透翁ら支部会員の研究報告は多大の感銘を与えた。社会経済史学13巻10号は「四国部会特輯」と銘うって、この大会を中心に、特別号として発

行されている。戦後、上田藤十郎理事の御努力により、四国支部は中国四国支部に拡充された。その後、会員各位の熱心な支持と、地元関係者のお骨折により、昭和56年度までに、九県のすべてにおいて、支部大会を開催していただくことができた。

支部報はこうした成果の上に立って発行されるわけだが、将来、更に質量両面での発展を続け、会報を会誌まで高める日の、近からんことを願ってやまない。

亡き恩師・上田藤十郎先生
を偲んで

広島経済大学 辻岡正己

去る十月末、松山商科大学名誉教授故上田藤十郎先生の追悼文を書いてくれるようにとの御依頼をうけた。上田先生と大変因縁深い方は奥田・今堀両教授をはじめ大先輩が多数おられるのと思ったが、御厚情を感謝しつつおうけしたのであった。

思えば上田先生との出会いは昭和25年4月、松山商大二回生の春であるから、31年も昔のことになる。経済史関係では一般・日本両経済史を上田先生に、西洋経済史を同じ本庄門下の宮本又次先生にならった。上田先生はいつも紺の背広で、講義の声はマイクなしでも大講義室の隅々にまで響きわたり、案にノートがとれたものであった。

最初の時間、先生は開口一番「日本経済史

は日本という一定地域内における経済社会の発展過程を研究する科学である」といわれて、その後は一時限中文献を板書して67冊も紹介された。まだきのうのように鮮明に思い出される。ゼミでの思い出はあまりない。新制大学一回生で、未だ大学としての体制が十分整っていなかったこともあろうが、ゼミ教授と指導教授が別々であったからかも知れない。

卒業から昭和42年広島経済大学へ勤務するに至るまでの先生との交流は、年賀・暑中見舞を通してのみであったが、以後は全国大会・中四国部会と年2回お目にかかれるようになった。先生は相変らず剛直ともいえるくらい謹厳実直な人であり、又先生御自身不自由な所があった故か大変温もりのある方であった。私の健康については、学部・大学院を通して3度も休学したこともあって、殊の外御心配下さり、無理をするなと口癖のようにいっておられた。

先生は昭和36年、「地割制度の研究」で阪大より博士号を授与され、48年11月3日には勲三等瑞宝章叙勲、翌年7月14日には正五位を追賜され、又社会経済史学会・中四国部会で重きをなしてこれ、学問・学会に多大の貢献をされたのであった。

先生は晩年、高血圧で苦しんでおられたが、52年6月には胃癌を、胃潰瘍ということで手術され、53年10月広経大での中四国部会の折は昼食時気分が悪くなられてホテルまでお送りしたが、この頃から次第に弱っていかれたようである。御逝去は今年6月22日、享年81才、病名は胃癌再発であった。

先生のおくさまによれば、「老後2、3年

でも思い通りに過ごせたので幸せな人だと言います」ということであるが、学会の度に先生の腰ギンチャクのように後をついて回った私からすれば、先生の訃報に接してからの三日は何とも寂しい。作道・桂両先輩とちがって不肖の教え子で誠に申し訳ないと思っている。今はただ先生の御冥福を祈り、私なりに頑張らねばと心に誓うのみである。

1981年度大会報告

事務局

1981年度の社会経済史学会中国・四国部会大会は第10回大会にあたっておりました。大会は島根大会法文学部の内藤先生はかの方々の御協力によりまして同大学内で開かれました。この10年間でちょうど中国四国の各県を一巡し、その仕上げを山陰の古都松江で行ったこととなります。当日は台風一過の晴天に恵まれ、快適な大会当日となりました。参加者は名簿確認の36名の他に島根大学の学生参加などもあり、40名に近い数となりました。遠来の参加者には報告者である佐賀の今久保先生、高知の武田先生の顔も見られました。共催団体である土地制度史学会中国四国部会からは岡山大学の久留島先生が参加され、また報告者として島根大学から仙田先生、木村先生が加わられました。

報告は8名の先生方により行われましたが報告に先だちまして、当部会の創立と運営に多大の労をとって来られた上田藤十郎先生の逝去を悼み、全員で黙祷を捧げました。本報告に入り、まず数量経済史の領域でめざましい仕事を進めておられる岩橋先生(松山商大)

が「松江藩領における錢遣い」について報告され、本位貨以外に広汎な「錢遣い」地域が存在し、その深度は単に農村経済の範囲を越えて藩経済の体質をも規定するものでありうることを松江藩について説明されました。新保博先生（神戸大）との間で論争をよんだ興味ある事実について一層の展開を示したものです。次いで木村隆之先生（島根大）は高度経済成長期を中心に「島根における労働運動の展開」につき語られ、運動の展開要因と停滞要因を示され、春闘体制の整備の一方で進められた種々の問題点を指摘されました。先生は社会政策学会においても御活躍中です。

「松江藩の鉄山政策と製鉄技術」について報告された土井作治先生（広島県史編さん室）は既に広島県の近世史に関して多くの仕事を発表されて来られましたが、今回は中国山地のたたら製鉄の問題を松江藩領に拡大し、藩の鉄山政策と製鉄技術の関連を論及され、伝統的といわれるたたら法そのものの中に認められる生産技術の改良が藩政策をも規定する点を示されました。イギリス絶対王制期の分析で当部会でもこれまで積極的な報告と問題提起をして来られた尾野比左夫先生（ノートルダム清心女子大）は「ヘンリー7世の財政政策」とりわけエクステッカー制からチェンバー制への移行の過程に見られる王室財務行政上の特徴から、絶対主義的国家建設にはたした役割の大きさについて報告されました。我国の絶対主義分析に際しても大いに参考とすべき論点であります。また土地制度史学会で御活躍の仙田久仁男先生（島根大）からは「独占価格論への一視点」として、独占価格

論を競争論から説いていくのではなく、絶対地代論を応用して解明していくという新たな問題提起をうけました。そのことで価値の「分割法則」との関連が示されることを指摘され、とりわけ現代史研究を進めておられる方々の関心をひきました。石見郷土研究会にあって長年郷土史研究に携わってこられた原龍雄先生は「天領支配と石見鉾山」として徳川氏の石見領有の背景、銀山経営が村落共同体に及ぼした圧力などを紹介されました。土井先生の報告とあわせ、着実な関連報告が出されたことは本大会にとってもありがたいことでした。さらに若手研究者として広島大学大学院の北尾泰志君が「幕末鳥取藩藩政改革論」について報告され、安政改革期の在方支配の基本的特質が作人の耕作権確保にあったことを明らかにされました。近世山陰地方研究が進化しつつあることは次回、この地域に当番校が巡ってきた時に一層の期待が持てるものであると感じさせてくれました。最後に遠来の今久保幸先生（佐賀大）は「19世紀末におけるドイツ労働運動の展開」の報告をされ、20世紀ドイツ労働運動の先駆制をなす同部門の労資関係機構の編成原理の変化を職場編成や技術革新、熟練形成との関連から論及されこれまでの一連の研究とあわせ、我国の労資関係史研究にとっても大いに参考となるべき諸点を紹介されました。参加者間での討論は夜の懇親会でも続けられ、美味な松江の料理を味わいつつ、散会となりました。

最後に内藤正中先生、仙田、木村両先生ほか島根大学の諸先生の御協力に改めて感謝したいと思います。

次年度当番校からの御案内

松山商大 比嘉清松

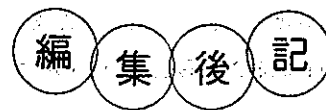
次回、1982年度部会大会は松山商大で開催されることになりました。本会の充実に力を尽くされた故上田藤十郎先生は、最後までその発展を願っておられただけに、後に残されたものの1人として責任を感じます。

周知の通り、松山は、人口40万を越す四国最大の都市として、また、政治、経済、文化の大きな中心地として発展しつつありますが、同時に、古く香りの高い文化と伝統をはぐくんできた地でもあります。正岡子規を記念して今年オープンした市立子規記念博物館（館長和田茂樹松山商大教授）もその1つのあらわれでありましょう。このような環境の中で、歴史研究も盛んであり、伊予の歴史の研究についても、多くの研究者が多岐の研究成果を挙げつつあります。今その全てを紹介することはできませんが、少なくともその1つとして、本会の理事景浦勉氏を会長とする伊予史談会の研究活動を挙げることができます。開催校の1人として、その成果の一端をうかがうことができたらと思っております。

松山商大は、お城の下、キャンパスからお城を仰ぎ見る位置にあり、お隣りの愛媛大学とともに、文京地帯の一角を占め、市街地にありながら比較的環境にめぐまれた所にあります。創立60年、経済、経営両学部を中心に、最近、人文学部（英語、社会の両学科）が加わりました。社会科学関係を主とする図書約30万冊を蔵する図書館は、創立50周年を記念

して改築され、面目を一新しました。稀観書も数多くあり、その中に、清良記（全31巻）やスミスの「国富論」初版、マルサス、リカード、ミルの初版等々が含まれます。

来年度開催校に関係するものの1人として実り多い研究成果が数多く報告され、充実した学会になるべく、およばずながら、お役に立てれば幸いです。会員諸氏多数の御参加をお願いする次第であります。



ともかくも創刊号を皆様のところへお届けできることになりました。会費の値上げという側圧もありまして、我々としても最大限の努力は試みるつもりですが、今後とも編集にあたりまして、皆様の一層のご助力をお願いしたいと存じます。第二号からは各県毎の会員諸氏の研究動向のご紹介や近況報告などを含め、皆様のご活躍ぶりを反映させ、より多くの方々の意見交換の場となりますよう取り組んでいきたいと考えております。参考意見や投書などお寄せ下されれば幸いです。

(文責・大崎)